

# 心をひとつに

## 秋田県人会 九州・沖縄

題字:ばんば三郎

### 秋田犬「のの」

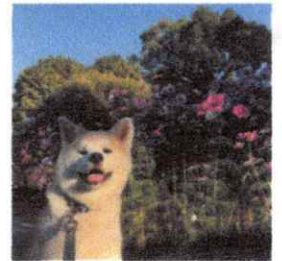
「のの」は、雌の秋田犬、6才。名付け親は秋田市在住の佐々木雅子さん、希望の希から、「の」ぞみ。望から、「の」ぞむ、という意味を取った。佐々木さんは、ロシアに行った秋田犬「夢」、ロシアから秋田に来たシベリア猫「ミール(平和)」に大館の希望「のの」が加わったという願いも込めた。名前を募集したのは、大館市を中心に芸術活動を展開している「ゼロダテ」。「のの」の写真を撮影したのは、福岡・秋田県人会会員の矢野有子さん。矢野さんは、「のの」に会うため、2014年から5年間大館に通い続けている。その回数は、なんと17回！往路は佐賀空港から羽田経由で大館能代空港へ。毎月8の付く日は、空港で秋田犬が出迎える。



秋田犬「のの」

2泊3日の行程で復路は、大館能代空港から羽田経由、福岡空港へ。限られた日程で少しでも長く「のの」と共に過ごしたいという願いから、「のの」に会うためだけに大館に通う旅を続けている。最近では、大館で寝食も共にしている。矢野さんを見ると「のの」は、飛びついて喜び、くると巻いた尻尾をビュンビュン振って喜ぶという。ハチ公物語と同じ。犬が人間を見分けるのは、匂いや声というが、動物行動学者は、MRIで脳波を見た結果、言葉や口調も理解すると分析している。矢野さんが「のの」と、散歩に出て宿までの帰り道を迷うと「のの」は、しっかり、道案内する。矢野さんは、将来、福岡で秋田犬を飼う夢も持つ。

大館市は、「秋田犬と暮らす地域おこし協力隊」を、2016年9月から始めた。隊員第1号となった福岡県春日市の西山奈見さんは、2019年8月末まで3年間、大館市に住んだ。秋田犬「あこ」との暮らしを通じて、大館市の魅力を会員制交流サイト(SNS)などで発信する一方、イベントに参加した。任期を終えて西山さんは「あこ」を春日市に連れて帰った。雪遊びをさせてあげられなくて申し訳なく思うこともあるが、「あこ」は、元気にのんびり暮らしている。地域おこしは全国で進められているが、大館市は秋田県内で最も多くの地域おこし協力隊員を受け入れている。



秋田犬「あこ」

### 増田の内蔵

九州産業大学准教授で福岡市に住む1級建築士、松野尾仁美さんが、増田町の内蔵について、2020年1月10日の新聞に寄稿されました。

増田町の内蔵は黒漆喰で仕上げられ、扉は鞘飾りで包まれていると紹介しています。松尾さんは、蔵といえば、中にお宝が眠っているようだが、増田の内蔵は、蔵そのものが宝物とも。暖冬のこの冬はともかく、増田町は秋田県内でも有数の豪雪地帯。成瀬川と皆瀬川の合流点にあり、江戸時代から商業活動が盛んになります。葉タバコや生糸は、一時、県内最大の産地に。明治に入ると、商人が共同で増田銀行(現在の北都銀行の前身)を創設したほか、水力発電会社や製陶会社も設立されます。大正時代には、吉乃鉱山の採掘量も増加し、商工業が発展します。こうした産業の中心になったのが、現在の中町、七日町商店街通りです。

当時の繁栄を伝えるのが、短冊形で大きな主屋と「内蔵」と呼ばれる土蔵で、20軒近くが並びます。雪害から守るために鞘となる上屋で内蔵を覆っています。主屋と内蔵はミズヤと呼ばれる細長い台所空間。そのまま、裏へと一直線で抜けることが出来るため、雪に閉ざされる冬は、ご近所さんが、ミズヤを往来していました。松野尾さんは、鞘と建物が入れ子の造りになっており、中に入ると包み込まれるような安らぎがあると言います。2013年、横手市は、この地区の約10、6%を伝統的建造物保存地区に指定しました。街並みの景観と建築様式や技術を後世に継承する取り組みです。1643年(寛永20年)に始まったと言われる朝市も、現在まで連続と続いています。福岡市の大丸天神デパート2階に店舗を構える稲庭うどんの佐藤養助商店も、増田の大地主だった小泉五兵衛の旧宅を買い取り、うどん店を併設する漆蔵資料館(国登録有形文化財)として利用しています。



増田観光物産センター「蔵の駅」